楓橋夜泊

張

繼

月落烏啼霜天滿

江楓漁火愁眠對

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲客船到

【作者】張繼 生没年不詳中唐の政治家・詩人 湖北省襄州の人。七五三年（年齢不詳）に進士に及第し、節度使（地方の軍政や行政

をつかさどる長官）の属官や塩・鉄の専売を監督する官などを歴任し、七六〇年ごろには都に帰って中央政府の役人に就いている。地方では善政を敷き、政治家としても評価が高かった。容姿は美しく清らかで、道教者の風格があつたとも伝えられているが詳しいことはよくわからない。

【語釈】*楓 橋：蘇州（今の江蘇省蘇州市）の西郊にある橋 このあたりは当時南北往來の要路であつた *江 楓：川岸の楓の木

*愁 眠：旅愁のため熟睡できないでうつらうつらしている *姑蘇城：春秋時代の呉の都 今の蘇州市 *寒山寺

【通釈】月は沈み夜鳥（よがらす）が啼き、霜の降りる気配が天に満ち満ちて、冷え込んで来た。川岸の楓（かえで）の木々の間には

漁火（いさりび）が点々として、旅愁のためにうつらうつらとして眠れない私の目に映る。もう夜明けも近いのかと思つて

【鑑賞】寒さとわびしさに震えている張繼 おそらく南方の地方官に赴任を命ぜられたころの作ではないでしょうか。都を出たころには

まだ暑さも残っていました。もう霜の降る晩秋なのです。船の外はまだ暗闇ですが、近くには漁火がちらついていています。もうすぐ夜明けだと思つていたら、近くの寺から真夜中を告げる鐘の音が聞こえて、暁までには時間があるなと思ひ直し、夜具を掛け直しているせつない作者が偲ばれます。